

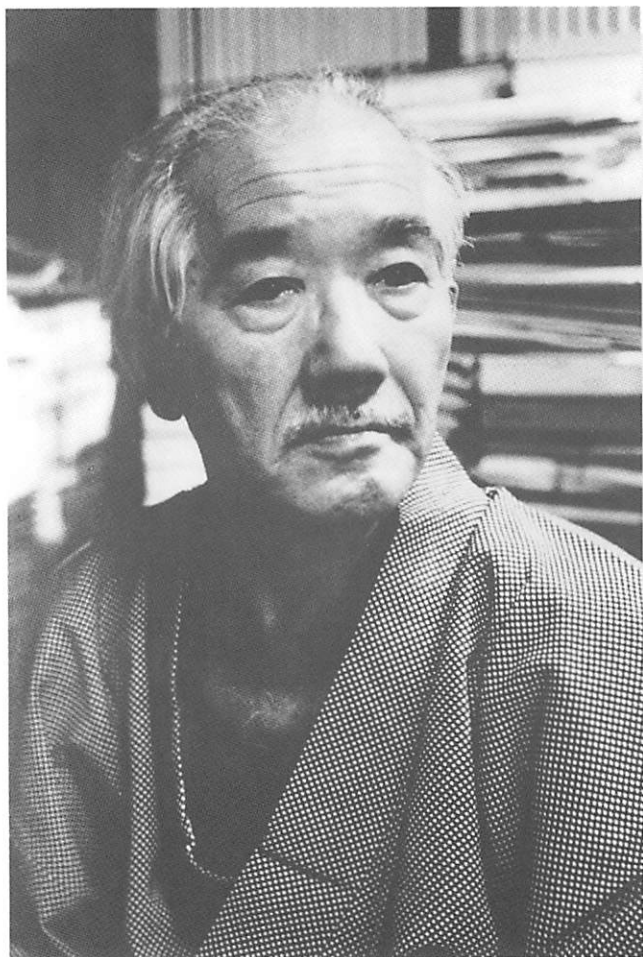
新

歌人群像

## 松村英一

● 悲しみを越え、己を越えて

● 川崎勝信 ●



「私の生涯は苦しいことと、悲しいことだけであって、楽しいことは何もなかった」。八十九歳の頃、松村英一はしみじみと弟子にこう語ったという。

英一の一生は、この言葉のとおり、苦難と悲しみに満ちたものであり、現実をありのままに受け入れながら、それを乗り越えようとす強い意志の力が、すべての歌に込められているように見える。

## 窪田空穂との出会い

松村英一は、一八八九（明治二十二）年十二月三十一日、東京・芝愛宕下に四男（一人は夭折）一女の長男として生まれた。父は宮大工で、英一が二歳のとき家族とともに故郷である愛知県の熱田に帰っている。一九〇〇（明治三十三）年、英一は十一歳で熱田高等小学校を中途退学して上京、京橋の叔母の嫁ぎ先である錦絵商の店に奉公に入った。

本好きな英一は、勤めが終わった夜更けに様々な書物を読み漁ったという。次第に歌心が芽生えた英一は、十五歳の折、雑誌「少年界」へ投稿、そこで生涯の友人、半田良平や植松壽樹などと知り合う。二人とも旧制の中学生であった。後にこの三人は、歌誌「国



民文学』の三羽鳥と謳われた。

一九〇五(明治三十八)年、十六歳のとき「電報新聞」の短歌欄に投稿し、窪田空穂の選を受ける。その投稿者たちが、同年、芝の青松寺で空穂を中心に結成したのが「十月会」である。英一は初めて二十八歳の師にまみえた。空穂はこの年、詩歌集『まひる野』を出版し、その浪漫的で繊細な詩情は、当時の若い前田夕暮や土岐哀果、尾山篤二郎などに大きな影響を与えていた。

「私は未見の一人の青年に訪われた。その青年は、私達がよく見懸ける学生風をして居なかつた。黒っぽい木綿の着物に、黒の前垂をして、小倉の帯を締めて居た。股引も穿いて居たやうな気がする。青年は引き締まつた顔をして居た。ずっと相手を見詰める眼には、

燃えるやうな、迫るやうな表情があつた。が其の眼は、敏く動いた。唇の両わきには言はうと思ふ事を我慢して黙つてゐるやうな表情があつた。そして唇は健康に燃えて居た。」

一九一三(大正二)年に出された、松村英一の第一歌集『春かへる日に』の序文の中で、空穂は、初めて会つた十六歳の英一の印象を、こう述べている。ひたむきに何かを求めようとする若い英一の姿が見える。以来、二人は、一九六七(昭和四十二)年に九十歳で空穂が逝去するまで、長く厳しい師弟関係が続けるのである。

## 詠風の確立

しめやかに香のけぶりのゆらめける中  
にし眠る子が白き顔

父としも呼ぶこと知らで死にゆける子  
よ紅の汝れが頬の色

『春かへる日に』は、空穂の『まひる野』に通う浪漫性を秘めた作品が多いが、注目されるのは亡き幼子を詠んだ深い悲しみの歌である。そこには、後の英一短歌につながる写実的な作風が見える。

英一は一九〇九(明治四十二)年、二十歳

のとき同年の太田樂子と結婚した。樂子は文学少女で、実家は日本橋近くにあつた金融業を営む老舗であつた。当然ながら大きな反対を受けたが、空穂の仲立ちによつてその恋を成就させた。しかし、一九一一年から二二年までに、生まれたばかりの一男五女のすべてを亡くす悲劇に見舞われる。一番長く生きた子でも三歳であつた。この悲しみの体験が、英一の人生観を育み、以後の短歌の基調となつてゐる。

一九〇五(明治三十八)年、歌集『まひる野』を出してから空穂は、自然主義の影響を受け、一九一五年頃まで小説を書くことに熱中した。英一も一時歌を離れ、一九一三年頃から五年間ほど小説を書いている。

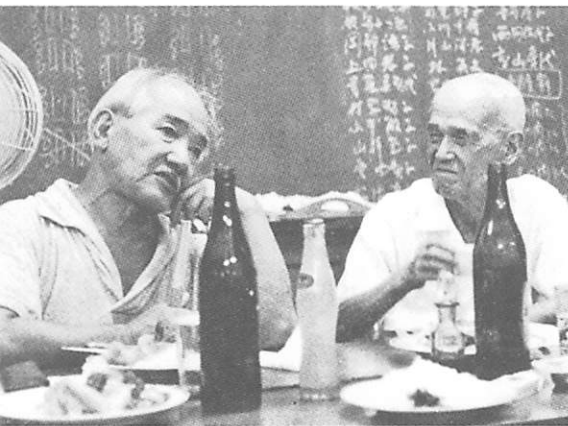
一九一四(大正三)年六月、小説や研究論文などを主とした文芸雑誌「国民文学」が創刊される。窪田空穂が主宰し、英一は記者としてこれを助けた。空穂の回想によれば、創刊は当時無職の英一に仕事を作る目的もあつたという。しかし、本はまったく売れず、翌年からは会員制の短歌雑誌に変えざるをえなかつた。空穂や英一の私財を投じての発行であつたが、一九一七年、妻を亡くして帰郷する空穂に代わり、英一が単独で雑誌の運営に当たる。以降、一九七九年までの六十三年間、

# 松村英一

職に就くことはなく、「国民文学」を守り続けた。「窪田先生の名を辱めないように」との一念からであった。

この一九一七年を境として、英一は短歌に回帰する。すでに逆縁の悲しみや小説を書くことを通して、人生の種種相を見つめ、これを写実する態度は確立されていた。また『万葉集』の直截的な感動表現や大らかな調べを、歌の基本として尊んだ。

この年、英一は東雲堂書店から出された初めての短歌総合誌「短歌雜誌」の編集に携わる。一九二七年から三〇年までは、発行所が英一宅になるほどの深い関わりであり、廃刊になる三二年まで、多くの歌人の作品や新人の発掘、古典研究や口語短歌、プロレタリア



第1回国民文学全国大会で、菊池庫郎(右)と  
歓談する松村英一(1961年8月5日)

文学の問題まで幅広く採り上げて、歌壇の発展に尽くしている。

## 命を見つめて

白粥しらがゆの煮えのよろしとわが妻に病みて  
やさしきものいひにけり

わが方に向ひて泳ぐ子ひたすらに水を  
吐き来る顔はかなしき

澄みてひびく水の音かも命かも吾は素  
直に身を護るべし

次々と子を喪う悲しみは、母親である妻にとつては如何ばかりであったか。英一は生涯、妻を氣遣い、後に生まれた二人の男の子を愛した。また、自分より先に逝く弟や妹への心遣いや、幼くして世話になった叔母を自宅で見取るなど、肉親への深い愛情は人一倍であった。これらの歌は第二次大戦前のものであるが、妻や子に注がれるやさしい目差がある。三首目は、病む身を川辺に置いての感慨で、深い自愛の心を感じさせる。

死なざりし命一つをさきはひに敗れし  
国にわれは寂し系

両の手に膝をかかへて寒からず光はな  
がき今日の夕ばえ

暁と夜とのさかひの少安に水をわたり  
て来る鳥のこゑ

一九四五(昭和二十)年八月、第二次大戦が終わった。東京の空襲も激しく、四月十三日の大爆撃によって自宅は全焼、家財も一万余冊の書籍もすべて焼失した。「国民文学」は一年間の休刊を余儀なくされたが、翌四六年四月には復刊している。無一物からの再出発であったが、妻と二人で乗り切った。「戦災をうけたことは国民の負うべき当然の犠牲であつて、苦にしたことはなかった」と、後に語っているが、その精神的な強さを感じさせる。一、二首目は、「命」や「光」という言葉のなかに、敗戦直後の寂しさと自然の美しさが写されている。三首目は一九五二年の作、明け方の大河の静かさを鳥の声に表象して、英一の代表作の一つとなった。

## 山へのあしがれ

水を踏み来りて花の春に逢ふしらしら  
として深の一つ木

山にして山が息を吐く林にて林が息す  
ひとり聴くべし

風紋を刻む雪のうへ枝すりていまだ開  
かぬ木の芽を散らす

松村英一の山好きは有名で、作品数も多い。若い頃、亡き子らの鎮魂のために登ったという山歩きであるが、六十歳を過ぎてからは本格的に高山を目指した。生涯六十近くの山を踏破しているが、このうち三千メートル級の山十座のうち九座までは、六十一歳以降のものである。山の自然の中で困難を克服する勇



倉吉民芸館で、樂子夫人と（1969年8月5日）

気を培い、山での絶対的な孤独感を味わうためであったと、後に述べている。

英一の山の歌は、高山の頂での高揚した気分のものより、山の自然が見せる何気ない表情を切り取ったものに味わいがある。向き合う一瞬のその姿を通して、命のかなしみを見つめているのであろう。

## 言葉の最後

一人の歴史をはりて土にかへる齢ちか  
づく何を願はむ

しづかなる月と雪との仲らひの声かも  
きこゆ今のうつつに

空晴れてわたる白雲見ながらにひとり  
咳く妻なしわれは

風が吹く木立がそよぐ一人の命終りて  
夜の明け近し

晩年の歌である。一、二首目、月下の庭前に立っての静かな感慨である。雪と月とのなかに己の生と死を見つめている。長い苦難の道振り返りながらも、間もなく訪れるであろう死と向き合い、それに親しんでいる心が見える。後の二首は亡き妻樂子の枕頭にあつ

ての歌である。一九七三年、八十四歳の死であった。以来、英一は、妻を恋い、その面影を慕う歌を作り続けるのである。

左様ならが言葉の最後耳に留めて心し  
づかに吾を見給へ

一九七九年、九十歳の英一は「人に見せる歌はもう作らない」と弟子に話し、この一首を最後として筆を折った。「短歌は態度の文学」とする師空穂の教えを身をもって実践し、歌と「国民文学」に捧げた己の生涯を、心静かに見てほしいということであろう。「左様なら」という言葉に籠められた、深い安らぎと自愛の心が思われるのである。

「短歌は悲哀の文学」とする松村英一は、生命と向き合うところが悲しみの頂点とし、その悲しみを乗り越えてこそ、人間の心は豊かになると説いた。自分の歌碑は死後といえども造ってはならないとする英一は、清貧の志を貫き、己を乗り越える意志的な生き方を通して、今も人々に感動を与えている。

筆を折ってより二年、一九八一（昭和五十六）年二月二十五日、英一は九十一歳の生涯を閉じた。妻の位牌を胸にしての大往生であったという。

（かわさき・しょうしん「国民文学」選者）